
怪談 白菊

楽雨

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

怪談 白菊

【コード】

N1567D

【作者名】

楽雨

【あらすじ】

戦国時代の商人・左馬助と左馬助に愛された白菊、白菊の想い人・清鷹の怪談話

この話はあたしが見た話じゃございません。知人から聞いた話です。つまり又聞きなわけですが、馬鹿にしちゃなりませんよ。噂も真実なこと、あるでしょう。

すみません、あたしは話し下手なもんで、すぐに趣旨がずれちゃいます。

左馬助という男をお知りでしょうか。その男が、二年前でしたっけ、ほら、おつきな戦があったでしょう。その時分より少し前に、一人の女に会ったそうです。

たいそう美人の芸妓でした。笛が上手かったそうです。あと、夜のお相手も。

左馬助は助平な奴でね、気に入ったんですよその女が。だからぜひお抱えの芸妓、愛人にしたくてね。掛け合ったそうです。女の店は承諾しました。なんせ左馬すけはお得意様々。実入りが増えるからねえ。しかし、女には約束があった。よくある話です。

「お前のような綺麗な女つてのは」

俺は女の袖を引く。白い指が笛を吹くのを止め、黒い瞳が楽しそうに俺を写した。

「どうやってできる」

俺は笑ってそう聞いた。

「そんな世辞どこで覚えるの」

白菊というこの女は、俺が今まで見てきた奴らの中で一番綺麗な女だ。

「普通と同じ方法か」

今度は手首をつかんで側に引き寄せる。

「まあ、助平なこと、左馬助さま」

「まあな」

「ふふふ」

艶かしい、しかし純粹な子供じみた笑い。俺が好きなこいつの仕草だ。手放したくないと思う。身請けをしたいのだと、白菊にそつと言った。もう店には伝えてある。あとはお前の返事のみだと。

「店が承諾しても、あつしはあなたについて行きません」

その答えは俺にとって意外なものだった。

「なんでだ、今以上に贅沢させてやる。お前のために屋敷も建てよう」

鼻息を荒くして俺についてくる幸せを怒鳴った。

「理由をお話ししましょう」

俺なんかちつとも怖くない。白菊の目はそう語っていた。

「あつしには先を約束した男がいます」

白菊の男。それは白菊の田舎に住む幼馴染だった。

名は清鷹。

「田舎男にお前が買えるのか」

俺には自信がある。そのへんの小大名より、俺には金があると。

「清鷹は侍、近々行われるであろう戦の後、あつしを迎えに来ると約束してくれました。お館様は清鷹を懇意にしてくださいさってるそうです。もし、清鷹が戦で武將を討ち取れば、褒美にあつしをもらおう。こつちの気持ちも知らず、白菊は清鷹について話し続ける。」

「清鷹はそんなに強いのか」

「…武芸はいまいち、お館さまが懇意な理由も、文官としての才が素晴らしいからです」

まさに夢想だ。お前の恋人はすぐに死ぬ。

「夢を見てはなりませんか」

白菊は目を細めた。

「あつしは清鷹を信じています」

もうそれ以上、白菊を見たくなく、さっさと店を出た。

関山というこの男はどうしても好きになれない。中身も外見も、猛々しく乱暴者で単純なのだ。だが、仲間にするならこの男が一番だった。まったく腹立たしい。

「清鷹なんて大嫌いだ。新参者のくせにまんまとお館さまに取り入った」

そう言うと酒を勢いよく飲み干した。口の端から、酒と涎が混じり落ち服を汚している。下品だ。料理の食べ方もなっていない。

「だいたい武士たるもの、槍働きにて名をあげるべきなのだ。あやつがいつたいなにしたんだ。あの若造はただ机に向かうだけで」

「わかります、私もあの男が嫌いです」

長い話を聞き続ける気はない。

「戦の混乱の中、清鷹を」

「わかつてる。種子島に当たって死ぬ奴はいくらでもいるからな」

関山が酒気を撒き散らしながら大声で笑った。俺はそれに不快を感じながらもにつこりと笑って謝礼を渡した。

白菊は俺を裏切った。だから、約束に酔いしれるあの笑顔を壊す後悔させてやる。

俺の手をとらなかつたことを。

戦の前後は、人も物も行きかい忙しくなった。しばらくは白菊のことも忘れられた。

戦に勝利したのは地元の大名だった。その情報とともに嬉しいことを聞いた。

清鷹の戦死だ。

関山は成功したのだ。

「駕籠をよべ」

昼間にもかかわらず白菊のいる店へと向かった。早く教えなかった。夢は終わりだと。

「左馬助さま」

小さくねずみのような顔の店主が頭を下げ俺に近寄る。

「白菊の部屋を頼む」

「それが…白菊が部屋には誰も入らないでほしいと
「ほっ」

俺以外から清鷹の戦死を聞いたのだろう。哀れな女だ。今頃、俺の言葉の正しさを考え、涙しているのだろう。

「…話していいのかわかりませんが、左馬助さま、耳に入れてほしいことが」

「なんだ」

俺は気分がよかった。この小男の言葉も聞いてやることにした。

「白菊の幼馴染という男が、今夜訪ねてくると」

「おいおい、まだ白菊を狙う男がいるのか。」

「気味の悪い男で、今夜訪ねてくると告げてさっさと帰りました。」

白菊は男の名を聞いて部屋にこもり、男を迎える準備をしているのです

「…そいつの名前は清鷹か」

「ご存知でしたか」

関山め。はらわたが煮えくり返る。関山に文句を言おう。

そうしたら次の手だ。清鷹は必ず殺す。

「なあ、酒をもうひとつ頼ませてくれ」

「いざというときに酔われてはこまりますゆえ」

関山は時分は確かに清鷹を討ち取った。と主張し、結局二人で隣の部屋から白菊の部屋を見張ることになった。

本当に嫌だ。

「たしかに俺は清鷹を殺した。俺が直々に清鷹の首を切った」

「ではなぜ、清鷹と名乗る者がいるのです」

「知るか」

白菊はそわそわし、何度も化粧の確認をし、着物を整えている。

俺が来るとき、そんなことしていたのか。はじめて見たぞ。その上

等そんな着物。

そして、約束の刻限が来た。

白菊はいそいそと立ち上がり、清鷹と名乗る男を迎えに行った。

「あやつのは、清鷹が撃たれたときの面が忘れられん。凄まじい面で俺を食い殺そうとしているようだった」

あれだけ自信満々だったというのに、関山は身震いをしてみせた。単純馬鹿なこいつがこれだけ言っているということは、やはり清鷹は偽者だろうか。なら、こいつを焚きつけて取り押さえてやる。

白菊の部屋の襖が開く。

白菊と男が入ってきた。灯りが少なくて男の顔がわからない。

二人はゆっくり座り、静かに寄り添う。二人の間に絆が見えた。俺の頭が熱を孕んだ。

「花、灯りを増やしてくれないか。面と向かって話したい」

花とは白菊の本名か。

白菊は名残惜しそうに男から離れ、火を灯した。男の顔が今はつきり見えた。

「き、あ、清た、清鷹」

後ろにいた関山が脂汗をかき始めた。

「清鷹は生きていたか。まあいい。あとで夜道で切り捨ててしまいましょう」

関山に俺の声は届いていないようだった。武芸が苦手だったのだから影武者でも立てていたのだろう。

清鷹は侍というよりも都の貴族のようで、ほっそりとした姿をしている。端正な顔立ちは白菊とお似合いに見えた。俺はまた清鷹が嫌いになる。

「花、拙者は仕事場所が変わった」

清鷹が話し始める。白菊は緊張した顔で清鷹を見つめている。

「新しい主君は拙者を気に入ってくださり、配下になった祝いに二つのことを許された」

清鷹は白菊に微笑んだ。

「ひとつは花と夫婦になること」

白菊にうつすら涙が浮かぶ。それでも笑って清鷹の手を情一杯にぎった。

「もうひとつは拙者を殺した関山に復讐すること」

関山が負け犬のような悲鳴をあげた。俺は耳を疑った。白菊も驚いている。

「拙者はあの戦で死んだのだ。味方である関山の軍に撃たれ、首を切られた…そこにいる関山に」

清鷹は目だけをこちらに向けた。赤い赤い血走った眼。襖が開きこちらの部屋が丸見えになった。

「開けてくれ!!!」

いつの間にか関山は、別の襖から逃げようとしていた。関山はありつたけの、強い力で引いているはずなのに、襖は閉まったまま、壊れる気配すらない。

「拙者は閻魔さまに仕える…」

清鷹は座ったまま手のひらを関山に向けた。

「あがつ」

関山がもがき苦しみだし胸をかきむしる。指に血がにじみ、服が破れ、そして。

口から炎を吐いた。みるみる関山が炭にかわる。炭は粉になり飛散した。あとに残ったのは影のような、畳にこびりついた焦げ後のみ。

「鬼になったよ」

清鷹の態度はどこまでも静かだ。しかしだからこそ狂気が宿っている。

俺は身震いした。

殺される。

「花、それでも、来てくれるか。鬼となった拙者のそばに」

白菊、駄目だ。

「白菊！ 駄目だ！ 行ってはならない！」

襖がしまる。邪魔されないため。何度女の名前を叫び叩こうとも、音すらたてない。

「白菊！」

声が聞こえた。

「あつしはあなただけをお待ちしてました」

わかった。わかってしまった。見えなくても白菊は笑っている。

あなたなんて、鬼なんてこわくない。

あなたを愛している。

「白菊！ 白菊！」

俺は無様に叫び続けた。

「左馬助殿、拙者はあなたを知らなかったから、あなたを殺すお許しをもらってない。だから、今夜は見逃そう」

頭の中に鬼の声が響いた。俺の頭は真っ白になった。

白菊と清鷹の部屋、そこは血が飛び散り、凄まじい部屋になっていたそうです。

また、壁には血でこう書かれてありました。

「花清ふたりきり」

二人は結ばれたのでしよう。

左馬助ですか。あれから頭を剃って寺に入り、日々怯えているそうです。

みなさんも、人の恨みになることはしない方がいいですよ。鬼にかかわるとろくなことがない。

(後書き)

昔、阿部定と呼ばれる女性が恋人を独占しようと恋人吉蔵を殺し、「定吉一人きり」というメッセージを残した。という話をなんか可愛いなと思って触発されて作った話。

広告募集中

小説関連広告に最適です。
出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1567d/>

怪談 白菊

2009年3月24日09時22分発行